オードリー・タン大臣とのオンライン特別対談　対談録

【日時・場所】

令和３年１月２２日（金）１７：００～１８：００（日本時間）

県庁共用第１会議室 － 台湾　オードリー・タン大臣事務所

【参加者】

台湾デジタル担当大臣	オードリー・タン
山口県知事	村岡（むらおか）　嗣政（つぐまさ）
山口県議会議員(日台友好促進山口県議会議連会長)	島田（しまた）　教明（のりあき）
(株)山口フィナンシャルグループ会長	吉村（よしむら）　猛（たけし）
(株)リテールパートナーズ社長	田中（たなか）　康男（やすお）

【対談録】（敬称略）

村岡：タン大臣、聞こえてますでしょうか。

タン：はい、通訳の声もよく聞こえます。

村岡：それでは始めさせていただきます。

　こんにちは。私は山口県知事の村岡と申します。タン大臣には大変お忙しい中、今日こうした機会をいただきまして大変ありがとうございました。

　それでは、オードリー・タン大臣との特別会談をこれから始めさせていただきたいと思います。

　初めに、本日こうした素晴らしい機会を設けていただきました、株式会社リテールパートナーズ社長田中康男様からごあいさつをいただきます。

田中：タン大臣、私、ただ今紹介いただきました、株式会社リテールパートナーズの田中でございます。

　日本の中国・九州地区で 260 店舗のスーパーマーケットをただ今展開しております。

　タン大臣、オンライン会議の開催、とてもありがとうございます。ここにご参加のパネラーの皆さんもタン大臣とお話しできることで大変喜ん

でいただいております。新年早々タン大臣との明るい話題を、分かりやすく地方から全国に向けて発信できることを大変喜んでおります。

本日は限られた時間の中ですので、1 分でも無駄にしないよう、早速、日本の友人であるタン大臣のお話を伺って、地方創生型デジタル社会構築の起爆剤にしたいと、スタートになれればと思っている次第でございます。

最後になりますが、本日のオンライン会議に当たりまして、台湾政府、各部署の皆さんから大変なご協力をいただいたことを心から感謝をしております。併せまして、こちら側のスタッフの皆さんのご尽力がありまして、この会議の実現に至りましたことを感謝申し上げて私のあいさつといたします。ありがとうございました。

村岡：それでは、本日の参加者を紹介させていただきます。

山口県議会議員、島田教明様です。

島田：タン大臣、こんにちは。お世話になります。山口県議会議員の島田教明でございます。日台友好促進山口県議会議員連盟の会長もさせていただいております。

まず山口県での新型コロナウイルスの感染拡大に対して、台湾からは昨年マスクをはじめ、多くの医療用物資を寄贈していただきました。議員連盟を代表してあらためて心から感謝を申し上げます。

コロナ禍の今は、お互いの行き来もままならない状況ではありますけれども、県議会といたしましては、今後とも議員連盟を中心に台湾の皆さま方と実り多い交流を重ねてまいりたいと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

村岡：続きまして、株式会社山口フィナンシャルグループ会長、吉村猛様です。

吉村：タン大臣、こんにちは。本日はどうもありがとうございます。山口フィナンシャルグループの吉村でございます。私は、地元で銀行業を展開している者でございます。また、銀行業を今からいろいろフィンテックをはじめとして、DX を進めていかなきゃいけない業種でもございますので、きょうはいろいろとご指導賜れますようお願いいたします。非常に楽しみ

にしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

村岡：ただ今あいさつをいただいたお 2 人と、先ほどごあいさつをいただきました株式会社リテールパートナーズ田中社長、そして私、村岡 4 名で、きょうは参加をさせていただいています。よろしくお願いします。

島田議員からもありましたが、昨年の 4 月、そして 5 月に台湾からマスク、また医療用の資材、そうした物を送っていただきました。大変に困っている時でありまして、心から感謝を申し上げます。大変助かりました。

そして、まさにタン大臣がデジタル技術を使ってマスク対策などを打たれて、台湾がコロナの封じ込めに本当に世界で一番成功されておられる、そうしたことが、こうした他国への支援にもつながっているんだろうというふうに思っております。あらためて感謝を申し上げたいと思います。

きょうはデジタル技術を生かしました社会課題の解決、そして地域活性化、そうした方策などにつきまして、台湾の事例に学びながら、地方からデジタル社会を実現する可能性について、タン大臣と意見を交わしたいと思います。

テーマは地方からのデジタルソーシャルイノベーションとしています。

まずはタン大臣からスピーチをお願いしたいと思います。タン大臣、どうぞよろしくお願いします。

－基調講演－

タン：地方のデジタル・ソーシャル・イノベーションをオンラインでお話しできることを光栄に思います。

台湾には、こんなことわざがあります。「眾人之事，眾人助之」。ビジネスは助けで成り立つ。これは、私たちのソーシャル・イノベーションへの姿勢です。

今日、私たちは様々な緊張関係を目にします。具体的な例を挙げると、経済発展と環境の持続可能性は両立が難しく、必ずどちらかに妥協が必要となってしまいます。あるいは別の例で言うのであれば、技術革新が生ま

れれば社会的公正が問われます。このような関係が多々あります。

しかし蔡英文総統は次のように言いました。2016 年に 1 期目の総統として就いた際の言葉です。“対立する 2 つの価値の衝突として民主主義をとらえるのではなく多くの異なる価値観の間での継続的な対話として今は考えていく必要がある”。

ここは私のソーシャル･イノベーションのラボで、異なる様々な価値観による対話が具現化された場となっています。このサッカーゲームのフィールドはダウン症の人たちが作ったものです。世界が彼らにどう映っているかが具現化された芸術であり、位相的で創造性のある手法です。ここで私は働いており、台湾だけでなく世界中のソーシャル･イノベーターたちと毎週水曜日の朝から夕方まで顔を合わせます。

例えば、このような自動運転自転車を実験目的でこの作業場に持ち込みます。そこで新しい技術の有効活用法を皆で考案します。効果的なパートナーシップを構築し、地域社会のニーズを満たす新技術です。

毎年このラボで、総統杯ハッカソンを開催しています。ここであらゆる部門に関連する最良のアイデアや持続可能なテーマが選ばれます。例えば、人工知能を駆使した水漏れの検知です。水道管の水漏れが始まった際に修理担当者がいち早く通知を受け取ることで、水の利用効率を高められるのです。

突出したアイデアにはトロフィーが授与されます。トロフィーに組み込まれたマイクロプロジェクターからは、蔡英文総統によるメッセージが映されます。

過去 3 カ月間に行ったデータ連携を台湾全土で展開することを承認するというものです。今皆さんに画面でご覧いただいているのは、データの連携の構造です。政府はもちろん、民間企業に属する人、一般市民を含む全ての人々が特定の地域の共通の課題を理解し、解決に貢献できるようにデータを連携させます。

具体的な例を次の画面でご紹介します。これは台湾にいる何千もの人が大気質を測定し、その値を「g0v」のマップに反映させたものです。小学

校、バルコニー、サロンなど様々な場所で測定されました。このような測定や値の共有は基本教育のカリキュラムに組み込まれています。

読み書きよりも能力重視です。前者は参照したり読んだりですが、後者は何かを作り出したり生み出したりします。

市民科学を通じて気候科学に触れることで、小学生のような幼い子供たちも気候科学に取り組むことができます。そして行政院環境保護署と緊密に連携して数値の差が出ている箇所の究明を行います。これらは工業団地などであり、その敷地が政府の所有地であると後で判明する場合があります。そのため市民社会と協力して持続可能な開発とグローバル・シチズンシップの育成につながるような教育を行っています。

この取り組みが１つの問題を解決しました。左上に示されているのは水資源の管理についてです。有機農業などの地域が対象であり、現地の人は水質の汚染の有無を測定することができます。ですが、これは単なる「支援知能」や「人工知能」ではなく、市民が参加する「集団知能」でもあるのです。

こういった潜在的なテーマの発掘と総統杯ハッカソンを念頭において、私は台湾を回っています。「SI.taiwan.gov.tw」では若者たちが始めたツアーや政府の省庁が主導するツアーを参照することができます。これは確か台湾の東部にある花蓮だと思いますが、この時は先住民文化に長けた通訳がラボの人たちとのやり取りをサポートしました。したがって、中央政府の 12 の省庁の担当者は実際に何が行われているかを自分の目で確認できます。地域の人から何か質問があった場合は、内政部が衛生福利部の担当となる事項を伝えたり、経済部が科技部の事項を伝えることはしません。全員がお互いに刺激し合える同じ空間にいます。ポジティブな雰囲気の中で意見を出し合い市民の声にも耳を傾けることで、責任ある包括的かつ象徴的な意思決定を行うことができます。

日本には国家戦略特区という制度があります。該当地域にルールを設け、国レベルでまだ規制されていない制度や技術を試すことができます。台湾は「Sandbox.org.tw」があり、サンドボックス制度をフィンテックや自動

運転車 5G 医療業界などに限定したりはしません。汎用のサンドボックス制度があります。あらゆるものに適用されますが、資金洗浄とテロ資金は禁止されています。この 2 つの禁止事項以外に関してはどの地域でも実験ができます。

ただしその実験の結果を社会と公に共有することが条件で、実験の後半年あるいは 1 年後に社会により評価されます。良いと判断されれば全ての関係者に感謝を示し制度化します。却下された場合でも出資者の方々に謝意を表し、制度化すべきでないものに関しての今後の参考にします。

では社会に役立つものとは何でしょうか？これは「Pol.is（ポリス）」という AI の会話ツールで、UberX の最初の導入時のマップを示したものです。画面は私の家族や友人でそれぞれの意見が反映されています。該当地域のオープンデータとクラウドソースを共有し、次の質問をしました。「旅客運送用の運転免許を所持していない者が、客を乗せて料金を請求することをどう思いますか？」これに対し歓迎する意見も不安だという意見もあっていいのです。それらに正否はありません。注目すべきなのは、AI による会話は公共のデジタルインフラだということです。

そのため人々がお互いに共感し合うことで共通の価値を見いだせます。価値観が分断されて偏ったりはしません。最良のアイデアは、人々の思いに寄り添ったものになります。

画面の上に示されているのは私が投稿したもので、UberX の分類がタクシーかどうかに関係なく乗客賠償責任保険は必須であるべきだという主張です。多くの人が賛成していて反対の人はほとんどいません。賛成であれば私に近付き、反対であれば私から遠ざかりますが、返信ボタンがないので個人攻撃や荒らしの行為はできません。そのため、3〜4 週目の最後にこのやり取りを実行するといつも同じ形になります。否定的な意見や偏った考えは確かにありますが、そこはあまり重視していません。重要なのは近隣地域のほとんどの人が原則について賛成していることです。賛成の際には、登録や保険既存のタクシー会社に配慮した公正かつ公平な料金はもちろん、Uber の料金急騰や技術革新も考慮されます。これらは全て私たち

が多目的タクシーの新しい規制の策定に同意したという声明になります。

現在 Uber は Q TAXI での配車となっており、LINE TAXI など他の配車サービスの場合に関しても、全てに多目的タクシーの規制が適用されます。様々な分野における民間の意見を聞き入れた共同での規制作りが可能となったのです。

そして、結論になりますが、全地域のデジタル担当大臣としての私の仕事は、デジタル化をトップダウンで指示することではありません。私の役割は画面の真ん中の部分です。経済、環境、社会の様々な意見をつなぎ、共通の価値を見つけることです。それを基にイノベーションの実現と共有が可能となり、効果的な連携を促しデータの信頼性を強化できます。

3 つの持続可能な開発目標を踏まえて、私の仕事内容を簡単な言葉に言い換えると次のようになります。モノのインターネットがあればヒトのインターネットにしましょう。仮想現実があるのならそれを共有するようにしましょう。機械学習を行う時は共同の学習にしていきましょう。

ユーザーエクスペリエンスはヒューマンエクスペリエンスへ。そして、シンギュラリティが近付いている時は多元性が今あることを覚えておきましょう。

私からは以上です。

ありがとうございました。

－対談－

《村岡知事－タン大臣》

村岡：タン大臣、貴重なお話をありがとうございました。それでは引き続きまして、これから対談のほうに移らせていただきたいと思います。ただ今のいただいた講演も参考に、私どもから質問等させていただきますので、大臣から台湾の状況ですとか、またアドバイスなどをいただければと思いますのでよろしくお願いします。

それでは最初に私から質問をさせて、発言させていただきます。

今、わが国は本格的な人口減少社会を迎えております。特に地方では人

口減少の中でも、少子化、そして高齢化、これに伴う地域の活力の衰退、こうした大変大きな課題に直面をしています。そうした課題を、デジタルの力で何とか乗り越えていくことができないかと思っているわけですが、市民の力と、そしてデジタルの技術を生かしたオープンイノベーション、シビックテック、この推進が新たなイノベーションをつくっていく、そしてさまざまな地域の課題を乗り越えていく、解決をしていくということにもつながっていくのではないかというふうに考えておりますが、大臣のご経験も踏まえて、今後どのようにそうしたことに取り組んでいくべきなのかご教示をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

タン：台湾で科学技術が何を意味するのかというと、物理学のような自然科学や半導体に見られる生産技術だけではありません。私たちにとっては社会科学と社会技術も科学技術になります。協同組合は社会技術といえます。何世紀も前に見られた人の集まりの新しい組織形態だからです。現在はイーサリアムなど、分散型台帳のようなプラットフォーム協同組合に当てはめられます。総統杯ハッカソンでのクアドラティック・ボーティングも社会技術になります。実際、民主主義は社会技術です。4 年に一度の投票は単に 3 ビットのデータをアップロードしているだけではないのです。より良い社会を実現するためには継続的に参加することが重要となります。

台湾は日本のシステム RESAS を参考に TESAS を構築しました。このシステムを利用すれば、誰もがその地域の課題を確認することができ改善に向けて公に取り組めます。

私たちは特に若い人たちに焦点を当てています。若い人たちは自分の出身地や近隣地域に自ら望んで戻ることがあります。大学のキャップストーン・コースや、早ければ中学や高校の授業の一環で戻ります。その際、地域をより良くする社会科学や社会技術を学ぶ傾向にあります。そこで 1 年半前からの新しいカリキュラムでは、小学校、中学校、高校、大学で分類することなく、誰もが同じ持続可能な開発目標を持つようにしました。年齢、地域、教育方針の垣根を越えて同じ目標を掲げたのです。

私たちにとってシビックテクノロジーとは地域の主要の課題に耳を傾けることです。デザイン思考と計算論的思考が新たな可能性を生み出し、地域の人の目標に向かう姿が世界から見ても明確に映るようになります。

そして今、人口減少が問題となっています。これに対し多くの試みがされており、例えばドローンなどを駆使した農業の支援や地域のインフラのメンテナンスが行われています。自己修復可能なインフラに向けた多くの作業もこれに該当します。あるいは、地域の人が共同プラットフォームを活用して樹木の生育や庭園の手入れなどをする動きも見られます。拡張現実の中で木が話しかけるような形式なので「ロード･オブ･ザ･リング」や「アバター」のようですね。こういった手法をとることで、地元で時間を費やさない人は想像を膨らませられます。心はまだその地域にありますし、週に１日や３日、その地域で過ごし自ら貢献するようになるはずです。

そして、地域に子供たちがいれば彼らは地域の教育コミュニティの良き一員として貢献します。また、「Teach For Taiwan」などの非営利団体を通じて国際社会とのつながりも築くことができます。高齢者が遠隔医療を活用したり、若者向けのｅラーニング環境を整備することで地元でも暮らしやすい環境を提供できます。また、国際社会の一員として地域の活性化にも貢献できます。

村岡：ありがとうございました。社会課題の解決に大臣は、例えばこのコロナでもマスクの問題を市民のシビックテックを使って解決をされましたし、他のさまざまな成功事例を多くつくられていますが、われわれ、そうした経験がまだないので、これからそうしたことを山口でもできたらなと思っていますけれども、ちょっと考えると、うまくいく場合もあれば、うまくいかない場合も、やっぱりいろんな市民の方々の意見が発散してしまったりということもあるんじゃないかと思うのですが、課題を吸い上げて、具体の形にしていく成功を収められているそのポイントというか、重要なポイントとして考えられているところがあればご教示いただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

タン：成功へのカギは早い時期に何度も失敗し公に失敗することです。こ

う主張する理由は、マスクの供給状況を示すマップについても立ち上げの初日は失敗だったからです。

昨年の2月6日にシビックテックのコミュニティが立ち上げました。薬局で販売制限が始まった際、スタッフたちは番号カードの方式を考案しました。希望者は朝7時から8時の間に薬局へ行き、健康保険証と番号カードを交換するというスタイルです。そして、番号カードと引き換えに夕方にマスクを受け取ります。並んで待つ人全員にマスクを渡すのではなく、希望する人たちの行列をスタッフが早くさばいて夕方に売るようにしました。健康保険証の処理は昼休みにします。時間節約の手法です。

一方、マスク供給マップでは品切れの店を把握できますが、番号カードの方式とマップを同時に活用すると、メントスとコーラのような爆発を招きます。というのも、番号カードを配布する薬局はマップでは朝のマスク販売がゼロで示され、昼休みは完売で品切れと表示されるからです。正確性に欠けます。そのため入り口のドアに張り紙をする薬局もありました。「アプリを信用しないでください！」

早い段階で公に失敗を重ねることは謝罪をすることを意味します。ですので、私たちは薬局とシビックテックのコミュニティに、これは予測していなかった状態であり、非はこちらにある旨を伝えました。そして、次週の木曜日までに対策を講じる約束をしました。

利用者が受け取る2つの時間帯をマップに反映させました。番号カードとマスクのそれぞれ時間です。ですが、薬局側は納得しませんでした。午前7時から8時の間は番号カードを渡す時間ですが、7時半にカードがなくなる場合も考えられ、不正確さへの不満は解消されません。ですので、更に次の木曜までにボタンを加え、そのボタンでマップ上から消せる仕様にしました。品切れの際はボタンを押すように促され、マップから消えます。

このように2つのソーシャル･イノベーションの連携のために、総じて3週間かかりました。片方の事情を軽視し、もう一方のみを優遇すれば連帯感は生まれませんし、信頼関係もなくなります。

公に失敗するというのは能力を示すことであり、新しい解決策を共に生み出すことです。失敗をしましょう。全てに欠点があり、それが光の入り口となるのです。

村岡：ありがとうございました。大変勇気をいただきました。頑張っていきたいと思います。ありがとうございます。

それでは続きまして、山口県議会の島田教明議員からお願いいたします。

《島田議員－タン大臣》

島田：どうもありがとうございます。大臣のお言葉の中で、今知事さんも言われましたけれども、早い段階で失敗する、たくさん失敗する、公に失敗する、私の人生においても、なんかすごくいいアドバイスを頂戴したような気がいたします。ありがとうございます。

実は、質問させていただきたいことがあるわけでございますが、地方から先に進めるデジタル化についてお尋ねをしたいと思います。

私は人口減少や少子高齢化、そのようなことがさまざまな課題を抱えておる山口県のような地方においてこそ、デジタル化というものは求められていると思うわけであります。デジタル化することによって、地域課題を解決して、住民生活や経済活動、あるいは文化活動、そのようなものを向上させ、都市部との格差を解消していく必要があると考えております。

そうした中で大臣の著書を拝読させていただいた時に、台湾においては5Gの導入を都市からではなく、地方からやるんだと。大変感銘を受けました。従来とは異なる方式で、そのことをやろうとされておられる。日本はこのことが大変な課題でありますから。いつも東京から始めます。地方は取り残される。そのようなことになってきておるわけでございますが、5Gというこのデジタル化ということで、ここを何とか逆転をさせていきたいと思っておるわけであります。

そこで質問させていただくわけでございますが、大臣がそのように、地方からというふうにお思いになられた理念といいますか哲学といいますか、そのような理由と、実際地方での整備や利活用をその現状について今、

どのようになさっておるかお尋ねをしたいと思います。よろしくお願いを申し上げます。

タン：5G への行動に対する私たちの呼びかけは、遠隔地であるほど高度になります。どういう場所かというと 4G の普及率が低い地域ですね。こういう地域こそ 5G を最初に導入します。経験にそぐわない手法ですが必要なことでもあります。なぜなら、5G に関しては、普及している多くの機器を 4G から移行する際の決定的ともいえるビジネスモデルがまだ存在していないからです。

更に地方では対面式のコミュニケーションが重視されます。例えば、薬局に行ったり、心理カウンセラーを訪れて健康に関する相談をする時などです。これらは必ず必要となるものです。例えば、遠隔医療の利用の際に少しでも待ち時間が発生してしまうと、多くのトラブルの元になります。心理カウンセリングの際は、ちょっとした表情の変化も見逃さないようにお互いの顔を見ることが欠かせません。

まだ光ファイバーが接続されておらず、4G の普及率が低い場合においても、5G を導入すればその地域の多くの人々の命を救えます。例えば、薬局が必要としている物や、調剤し販売する薬の調達に自動運転車を活用することも可能となります。

こうしたことを踏まえて 5G の必要性を吟味しました。あれば望ましいという基準でもなく、5G のオークションへの入札額が高いかという基準でもありません。私たちは 5G のオークションで得た資金を最も必要とする遠隔地に再分配しました。

新興企業は大規模自治体の巨大システムインテグレーターの過当競争を心配することなく、本当に解決を必要としている課題に取り組めます。既存のサービスなどでの置き換えもないので、規制に縛られずにイノベーションを起こせます。支援は基本的に 5G オークションの資金です。

地域の人たちは自動運転車などで、台北などの大都市よりも新しいものを体験しているという感覚を得られます。また、台湾に住んでいなくて台湾を訪れた人にも効果があります。昨年だけでも外国を拠点としていた 25

万人以上が帰国したり、台湾での就業資格を取得して元の仕事に就いたりしています。より健康な地域を望んでいるのかもしれません。多くの人がハイキング、サーフィン、自然などを好みます。どのクラウドオフィスとも接続できる 5G を駆使した仕事ができるようになります。これが可能になれば、地方が最も住みやすい場所だという認識につながるはずです。

島田：ありがとうございました。日本でも多くの課題抱えておりますけれども、今のようなことを参考にさせていただいて、とにかくこの山口県からまた頑張ってまいりたいと思います。ありがとうございました。

村岡：それでは続きまして、山口フィナンシャルグループの吉村会長からお願いします。

《吉村会長－タン大臣》

吉村：よろしくお願いいたします。今、私どもも、地域の企業の皆さんも生産性を高めるため、また、イノベーションを起こすために、今必死で DX に取り組もうとしているところでございます。企業が DX を推進する上において、それが掛け声倒れにならずに、実質的に迅速に強力に進めていく上でポイントになることは何かありましたら、ご教示をいただきたいと思います。

　また、われわれ非常に悩んでおりますのは、強力に DX を推進していく、そういった人材が、なかなか地域に集まっていただけない。また、なかなか育っていかないというようなこともございます。そういった意味で、地域にそういった DX を推進する人材が来ていただける、あるいは育てていくためのポイント、またそういったものを、2 つになるんですけれども、ご教示いただければなと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

タン：デジタル・トランスフォーメーション、すなわち DX は、台湾では日常的なものを意味し、私は「支援知能」と呼んでいます。多くの人は AI を称賛しますが、私にとっては時間の節約を支援するものです。AI は実用性と現実的な捉え方が重要で、人間の価値観に沿うべきです。眼鏡であれば広告表示よりも鮮明な視界の実現です。自分の目的との一致です。壊れた

場合は自分で直したり、眼鏡店に修理を依頼できます。

大事なのは、スマートシティ向けの独自の一体型ソリューションに巨額のライセンス料を払うことではありません。私の関心はスマートな市民です。

マスク配給マップの開発のチャンスは誰にでもあります。あれは大気汚染のマップを発展させたものでした。今、そのマップには更にいくつかの変更が加わり、豚肉を売る地元の店などが表示されるようになっています。

単純なオープンソースの技術革新の原理で、例えば中学生もいくつか設定を変更して地域の時間の有効活用に貢献することができます。時間の節約はマイナスにならず、DX における AI の主な活用法なのです。時間が節約できれば質を上げられます。

そして新しい活用法を考案できます。しかし、これを逆にやってしまうとビッグデータやブロックチェーンなどを効率性と質の向上を考慮せずに扱うことになります。結果、時間を無駄にすることとなり DX への意欲も失われます。

早く動いて勝ち取る、あるいは公に失敗する。この姿勢が政府などの大きな組織での DX の際に最も重要となってきます。デジタル人材の確保ですが、優れた食文化が最も確実であることが分かりました。マスクの配給マップを台南の人が作ったのは偶然ではありません。台南は食の中心地として広く知られています。そのため、マスクのマップの制作に携わった人たちは台湾全土でのサービス展開を、私や政府高官と話すためにわざわざ台北を訪れる必要がありませんでした。通信環境は充実しており、Slack などでリアルタイムなやり取りを行うことができます。ですので、台南から移動せずに食べ物を楽しみながら社会全体に有益となるものを創造できます。

人々が、その地域の食べ物や音楽などの文化が優れていると認識することは、シビックテックの人材の確保につながります。昨年の「g0v Summit」の会場は長庚大学でした。皆マスク配給マップを通じて、同じ議題設定機能を共有しました。台北で中央政府の大臣たちと話す必要はありません。

こういった議題設定機能をどこでも活用できるようになれば、ブロードバンド接続、飲食、音楽などが最高レベルの地域が最終的な勝者となるはずです。

吉村：ありがとうございました。山口は食も文化も非常に優れている所でございますので、ぜひその魅力をアピールして、人材を集めてまいりたいと思っています。

また、企業については、まずできることから、小さなことからスタートして、それをどんどんみんなに広めていくというやり方でチャレンジしてみたいと思います。どうもありがとうございました。

村岡：ありがとうございました。次に株式会社リテールパートナーズ田中社長からよろしくお願いします。

《田中社長－タン大臣》

田中：私、タン大臣のお話を聞きまして、シンギュラリティっていうものについてすごく心配な気持ちを持っておりました。いわゆる 2045 年問題。AI ロボットが人間の知能を超えると。そういう時代の時に果たして人間の役割って何だろうかと、そういうことを考えている時に、タン大臣は、あれは単なるカウントダウンに過ぎないよというようなお話を聞きまして、すごく気持ちが安心した時がございました。

私のほうからは、この地域にありまして、いわゆる私ども営利企業なのですけど、NPO 等の非営利組織と有機的に結び付いて、地方の課題の 1 つであります地域貢献、それを略して貢献経営と言っているのですけど、これを経営方針の大きな柱の 1 つにしております。貢献経営がどうできるか。

その重要な点の 1 つが、いわゆる環境問題、もう 1 つはやはり若者の貧困であるとか格差であるとかこういったもので、教育の機会均等が失われると。こういう問題について何かできないだろうかと。

あるいは買い物弱者って言われるんですけど、やっぱり高齢化であるとか、子育ての世代でありますとか、リアル店舗に行けない方が結構出てきておりますんで、そういった方への取り組み、これを経営方針の柱の 1 つ

にしております。そういったところで、この営利組織とNPOとの有機的な結び付きを、いわゆる技術を使って、テクノロジーでもっと効率的に可視化して、効果的な困っている方への支援ができないだろうかと、こういうことを強く考えているところですが、この時に、リーダーシップはこの組織をまとめる、非営利、営利の組織をまとめるネットワークは行政が取るべきなのか、私ども食品を扱っている者が中心になって可視化マップを作っていくものなのか、それともNPOの方に中心になってもらってやっていただくのがいいのか、そういったとこら辺の、今までの経験とかタン大臣のお考えを教えていただければ大変ありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

タン：私が子供の頃、確か 6 歳だったと思います。母が友人たちと「Homemakers Union」を立ち上げました。元々、環境の持続可能性と権利擁護を目的とした非営利団体としてスタートしました。ですが、間もなくして組織の形態を営利団体へと変えていきました。名称は「Homemakers Union Consumers Co-op」です。今もまだ活動していて、もう30年以上になります。実際、ほんの数カ月前に私が賞を授与しました。プラスチック容器のリサイクル方法を確立したからです。

団体はショッピングエリアでの買い物の際に、近隣地域による買い物のグループという形式をとります。買い物に行くのが1人でも、それは地域全体のための買い物であり、買った物は近所の人に配ります。そして、購入した物に含まれるペットボトルなどは全て再流通の施設に戻します。施設では新たなパッケージの素材への処理が行われるので、廃棄物ゼロにつながります。環境保護を目的として行っているわけですが、これは非営利ではなく営利です。

明確な線引きについてですが、私の考えでは利益と目的の2つの間に線引きはないと思っています。誰もが利益と目的を念頭に置いて仕事をするべきであり、この2つが一致した時に目的のあるビジネスと連動する社会セクターが生まれると考えています。例えば、企業の社会的責任などと慈善団体など、社会セクターの組織の市場に応じた活動が一致するような場

合です。以前は切り離されていた非営利と営利のセクターで構成される社会セクターが常にリードしていくべきです。政府も統制ではなく支援すべきです。統制ですと国有企業になります。

つまり、私には社会起業家としての役割もあり、多くの事例としてフードバンク、タイムバンク共同での買い物などを見ています。あるいは、お互いの家族の高齢者を介護できる仕組みもあります。高齢者もテレプレゼンスなどを活用して、地域の組織に貢献できるようになっています。

社会セクターによるソーシャル･イノベーションは多数あり、このような革新は目的を持った企業と営利の社会セクターとの連携で実現します。ですので、双方が共に動くことが人、国民間の先導的な連携につながります。

田中：タン大臣、とてもいいアドバイスをありがとうございます。これからも子どもの居場所づくりであるとか、子どもの虐待防止であるとか、こういったことに取り組みながら、地方でしっかり若い方が育てるような環境をつくれる役割を、皆さんと共に果たしていきたいと思っています。ありがとうございました。

《村岡知事－タン大臣》

村岡：あともう少しお時間があるようですので、追加でまたお聞かせをいただきたいのですけれども、先ほど人材の問題が吉村社長から出ましたけれども、人材を引っ張ってくる部分もそうなんですが、中長期的にいきますと、どういう人材を育てていくかというところが大きな課題としてあると思います。これからデジタル化、あるいはデジタルトランスフォーメーションを進めていく上で、一口にデジタル人材と言っても、いろんなスキルがあるわけでして、これからの時代、特に地方においてどういったデジタル人材が必要かというふうにお考えかということ、それからそうした人材を地域の中で効果的に育成していくのにはどういった方法、手法が考えられるのかというところを、タン大臣のお考えをお聞かせいただきたいと思います。よろしくお願いします。

タン：最も有望なソーシャル･イノベーターは、聞くことに特化している人たちです。聞くといってもただ話を聞くことではなく、相手の主張に深く耳を傾けることが大切です。多角的な視点を持って、相手が置かれている状況に共感するのです。

地域が難題に直面している場合は、それに向き合う姿勢が大事です。そうすることで、課題に取り組む一人ひとりが安心して自由に可能性のあるソリューションなどの意見を出し合えます。「Pol.is（ポリス)」のようなAI を使用すれば、オンラインで済ますことができます。AI には我慢の限界がありません。

ですが、共通の価値観が発見された時は、その課題を抱える人たちの所に行く必要があります。マスク配給マップと薬局の例がまさにそれです。実際に、私は薬局の中に入って行って、現場のスタッフたちが抱えている不満や不安の声を聞きました。その際は柔和な態度が求められます。指示するためではなく声を聞くために行くわけですからね。ネガティブな感情があったとしても、ポジティブな提案ができるまで聞きます。

ですので、質の高い聞き方をできる人が最も貴重だと思います。では、その能力をどう伸ばすかです。最も大切なのは、自分は 1 人ではないと認識させることです。誰にでもそれぞれの好みがあり、好きな食べ物、味、音楽など人によって異なってきます。そして、まとめ役や仲介者が十分な人数でグループとして構成された時です。意見を求められる側から見て、要望をまとめる中心人物が誰であるべきかが明確になり、他の人は問題に取り組めます。その際、分野、地域、世代が違うということを理由に押し付けるようなやり取りがないようにすることが重要です。

大切なのは横断型のチームです。数多く存在する様々な分野、地域性、世代から成るチームを形成することです。そういった規模のチーム構成が皆に安心感を与えます。そして、世代間の結束も強まっていき地域活性化へのカギになります。

大事なのは年配者から若者への指示でも若者から年配者への指示でもありません。世代を超えて聞くことです。

村岡：ありがとうございました。デジタルで課題を解決する上で、やはり今おっしゃったように聞くこと、そしてそれぞれの立場に立つこと、それを共感することというのが、まず前提として重要だということが、よくお話を伺って、マスクの話も例に挙げられながらお聞きできて本当に参考になりました。ありがとうございました。

他にいかがですか。それでは、じゃあ最後に吉村社長からお願いします。

《吉村会長－タン大臣》

吉村：いろいろありがとうございます。今ずっとお話をお伺いしていて、そもそも DX の推進において、トップダウンというやり方は非常になじまない、もっとそういうやり方ではなくて、いろんな世代のいろんな多様性を持った意見を、いかに集約しながら進めていくかっていうのが、なんかポイントのような感じがしたんですけれども、それでよろしいでしょうか。

タン：その通りです。台湾にはこういう言葉があります。「青銀共創」。どういう意味かというと“若者と高齢者が共に作り上げていく”。つまり、双方が協力し合うことが最も大切です。

吉村：ありがとうございました。

村岡：タン大臣、誠にありがとうございました。新型コロナウイルスの流行によりまして、それによって、わが国のデジタル化の遅れというのが非常に顕在化をしてきて、今、国とそれからわれわれそれぞれの地方においても、社会全体のデジタル化をしっかり進めていこうということが大きく動きだしております。そうした中で台湾におけるデジタル化のまさに中心的存在として引っ張っておられる、オードリー・タン大臣に、これまでの取り組みの事例等、またご自身のお考えをお聞かせいただきまして、大変に有意義な対談となりました。誠にありがとうございました。

今日は、行政、そしてまた議会、金融、そして企業、各分野のさまざまな立場から質問させていただきましたけれども、今日、大臣から伺ったお

話、ご意見を参考に、今後それぞれの立場でデジタル化、これを地方からしっかりと進めていきたい。県民の皆さまが、多くの方々いらっしゃいますけれども、全ての皆さんに恩恵が及ぶような、そうしたデジタル化をコロナによってレベルアップした、そうした地域をつくっていければというふうに思っております。

大臣におかれましては、どうか本日のご縁を契機にして、引き続き山口県との関わりも継続をしていただきたいというふうに切に願っております。本県のデジタル化がより良いものとなりますように、今後ともご意見を賜りたいと考えておりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。大臣から一言あれば頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

タン：これは私がよく言う言葉です。“まだ鳴らせる鐘を鳴らしなさい。完璧なものはなく全てに欠点がありそれが光の入り口となる”。不完全さが、早い失敗と公の失敗につながり、マジックを引き起こします。今回、このマジックのような機会に立ち会えて光栄です。皆さんの長寿と繁栄を願っています。

村岡：ありがとうございました。以上で特別対談を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

タン大臣、せっかくですので、モニター越しですけれども一緒に記念撮影をお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

タン：もちろんです。ここで、このままじっとして待っています。

村岡：タン大臣、きょうは大変お忙しい中、こうして貴重な機会をいただきまして誠にありがとうございました。どうもありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

タン：特に通訳の方に感謝します。とてもスムーズにやり取りができました。